

南山短期大学人間関係研究センター事業報告

(1984年)

I 研究会

1. 「もう一つの主婦像 — 商店のおかみさんたち」… 天野 正子(千葉大学) …… 269
2. 「人間関係科における体験学習」 …… グラバア俊子(南山短大) …… 271
— 一教員の十二年間 —
3. 「体験学習と理論学習をめぐって」 …… 中野 清(南山短大) …… 273
— 背後を読む —

II 社会人研究

1. 人間関係基礎研修講座 …… 277
2. 人間関係専門研修講座 …… 279
3. 人間関係特定研修講座 …… 281
— 教師のためのセミナー —
4. コンサルテーション …… 283
— 「名古屋いのちの電話」電話相談員養成講座の計画と実施 —
5. 社会人研修参加者統計 …… 285
6. 1985年度 社会人研修予定 …… 286

- III 南山短期大学人間関係研究センター規程 …… 288

「もう一つの主婦像—商店のおかみさんたち」



天野正子
(千葉大学助教授)

昭和48年東京教育大学大学院博士課程中退後、南山短期大学
人間関係科助教授、昭和53年金城学院大学文学部助教授
昭和59年千葉大学助教授

主著 「第三期の女性 — ライフサイクルと学習」学文社
「集団 — サイクルの戦後思想史」(共著)平凡社
「女性人材論 — 職業的能力の開花」(共著)有斐閣
「学習する女性の時代」(共著)日本放送出版協会
「現代女性の意識と生活」(共著) ”

「女性の社会進出」という言葉が使われるようになってからもう久しい。そしてその言葉が色々な場合によく使われると、私たちは、その現象が何を意味し、実際にはどうなっているのかということも確かめないまま使用していることが多い。しかし「女性の社会進出」という現象の背景には、日本の産業化、都市化という大きな社会変動、そして生活と労働の分離、家庭と職場の分離という過程があった事を見のがしてはならない。その過程の中で、まず女性が「男は外、女は内」という規範に支えられながら、次第に生産の場から後退し、家庭のみが生きる場となったのではあるが、1970年代前半からライフサイクルや生活全般の変化に伴って家庭の外にある職場に、ようやく進出することが可能となってきたのである。しかし、この「社会進出」に当てはまるのは、全労働人口の約70%を占める、いわゆる雇用者の妻たちであって、残りの約30%の妻たちには全く異った生活があり、労働への参加はもう少し別の形でおこなわれているのである。天野氏の研究発表は、まさにこの主流に入っていない「もう一つの主婦像—商店のおかみさんたち」に関してであった。

天野氏の発表は雇用者、あるいはサラリーマンの主婦たちの生活に対比される商店のおかみさんたちの生活を、零細小売業の存立条件とかかわらせつつ、おかみさんたちが、いかにその家業である小売店の経営的役割を分担しつつ、主婦的役割を果たしているかを明らかにしようとしている。

さて、日本の小売業の構造的特質として従業員1~4人の小規模小売業の数が全小売業の83.4%を占めるのに年間販売シェアは28.6%であること、零細小売業の開廃業の数からみると、廃業数以上の開業数があることが挙げられる。従って、大型小売店(スーパー)のような目立つ存在ではないが零細小売業が存続し漸増しているのは事実であり、零細小売業の存立条件の1つに家族、特におかみさんの労働力への依存があげられる。労働力としての商店のおかみさんは当然のことながら商店を住居とすることから弾力性のある就業が可能であり、夫と共同経

営者的立場にあることからモラルが高く、また顧客と親密なコミュニケーションを持ち得ることなど、他の雇用者では得られない面を持っており、それが商店経営にとって大きなプラスとして働いている場合が多いといえる。

では商店のおかみさん達の意識はどのようなであろうか。天野氏の調査結果によれば基本的には顧客次第で成り立っている小売店の場合、1日約9時間の労働時間は家族従業者に依存する度合が高く、主婦であるおかみさんにとっても家事労働は家業経営のための労働の余暇に行なわれている。家事労働の殆んどは主婦が担当しており、夫の家事参加に対しては妻の側に抵抗感はあるものの、夫・妻相互の役割の互換性は相対的に高く、妻は自分の出身家庭の文化や職業歴も影響して、夫と協力して家業経営に参加することは選択の対象以前であるという考え方をしている場合が多い。夫と妻の力関係でいえば「表ではもちろん、家庭内でもまず夫をたてて」という意識が強い。

小売店のおかみさんたちは自営業の主婦であることについて「サラリーマンの妻の座」を時には羨ましく思うが、しかし雇われているという形で会社や工場で働くことは望んでおらず、「ながら育児」ができ「働けばそれだけ成果」があり、「人から命令をうけない」自営業のよさを認めている。しかし小売業の将来展望については積極的な評価と「今のままでよい」という現状維持的などちらかといえれば消極的な評価が共存している。

天野氏の発表は商店のおかみさんについての調査研究の第一段階をまとめられたものであるが、小売業の主婦たちが生活の場と労働の場を同じくする中で生き、その両者を重ね合せながらサラリーマンの主婦にはみられない弾力性のある労働に従事し、同時に生活者という視点を持ち合せている事実注目している点が高く評価されるであろう。センター研究会への出席者は比較的身近にありながら、あまり注意を払われないできた女性の生活や生き方に目を向けると同時に、今日の社会では分離しているのが当然とみられている労働と生活を総合して共存させていく生活型態の意味が何であるかをさらに考える示唆を与えられた。限られた紙面で、研究対象となった商店のおかみさん達の生活の基盤である零細小売業について、また、その商店主婦の労働と家事についての論理的分析や、きき取り調査の生き生きした報告の全体を十分に伝えられないのは残念であるが、全体としては大変意義深い研究会であった。天野氏がこの研究を今後さらに掘り下げられることを大いに期待したい。

(文責 伊藤 雅子)

人間関係科における体験学習

—— 一教員の十二年間 ——

グラバア 俊子
(南山短期大学助教授)

1976~77年ボストン大学, ハーバード大学 ダンスセンター, Esalen Institute 等で学ぶ。自己成長におけるからだの教育的役割を研修し, 現在はオイリュトミーに関心をもつ。南山短大でボディーワーク等を教えている。

私の経験においては人間関係科の教育の流れを3つの時期に区切ることができます。最初が1~3期生までであり, 従来の学科内容をEIAHE' という体験学習の過程に組み替えることに努力した時代でした。そこでは, 民主主義とコンセンサスの意味など, 体験学習又は人間関係科の精神と理想を学生に伝えようと思いました。この時期の合宿ではプロセスとコンテンツの学習に重点を置き, EIAHE' のステップを学ぶことと, 「今ここで起こっていること」つまりプロセスを捉える訓練を徹底的に行ないました。新米教師である私は方法論にばかり携わっていて, 内容がないように感じ, また自分が何故教師といえるかが大きな問いでした。

アメリカ留学後の5~9期生までが私にとって第2期です。5期生には「5つのライフスキル」というチェックリストを提示したり, 6期生には「ボディーワーク」を開講しました。それらを通してなんとか学生に成長の具体的な手がかりを伝えたいと考えたのです。成長のしかたを学ぶこと, 学び方を学ぶことを大切にしようという考え方がはっきりしてきた時期であり, 先の問いに対しては「自分も成長し, そう努力しているから」と答えていました。また, 授業時間内に学生と出会おうという姿勢が意識的に出てきました。つまり, 授業の中でこそ日常的な場面に隠されたその人そのものを引き出すことができるのではないかと考えたのです。私自信がEIAHE' の過程に余りこだわらなくなり, 出会えさえすればいいのではないかと考えるようになってきた訳です。そうすると体験学習という一つの教育方法又は学習方法とは一体何なのか改めて問われてくる訳です。

そこで, 「私と体験学習との出会い」というところに戻ってみたいと思います。大学入学時から言語の限界性ということが私にとって大きな問題でした。そして, 学園闘争の中で大学教育における関係づけの放棄, つまり関係づけがなされていないのが今の大学一番の問題ではないかと感じたのです。それは理論学習が, 学んでいる主体である私, そして他の学問領域, 今社会で起こっている事, 自分が直面している出来事と切り離して行なわれ, それらの関係づけは学生の責任だっ

た訳です。しかし教育的営みという視点からすれば、それをどう援助できるかが一番大切な点だと考えたのです。そうした疑問を感じている時に JICE のラボラトリー・トレーニングという体験学習に出会ったのです。そこで言語の限界性に対して非言語的コミュニケーションという可能性に出会い、知的な理解と共に、今ここに生きるという理解が生じるのを体験し、そこに、教育的営みとしての関係づけの可能性を見たのです。当時私にとって体験学習とは、私がどのように私の言葉と、そして他者（世界を含めて）と生きたオーセンティックな関わりを結んだらよいかを学ぶことであったと言えます。

つまり、スタートの時点から私の中には体験学習について体系や方式はなかったのです。むしろ、それを求めるよりは、日々の実践をふりかえり、新たな仮説をたてそれを試みていくことにより「体験学習」という用語の内容を充実させることが重要と考えました。それは今も変わりませんが、変化した点は初期に体験学習の特徴としてあげた 1.互いの生きたかかわりを基盤とする協働学習、2.主体的な学習、3.個別的な学習、4.学び方を学ぶ学習という 4 点が、お題目から実際に大切にできるようになってきたことだと思います。このことは、学生の顔を見なければ最終的なプログラムは立てられないと感じたり、学生の反応を尊重して受け取れるようになったところに表われていると思います。そして今は以上の 4 点が抜けていたらそれは体験学習とは言えないと考えています。

最後に、10 期生から今に至るまでが私にとってターニングポイントであると感じています。私にとって体験学習とは何をどううまく教えるかということではなくて、授業で教師と学生がどう向き合いかかわるか、つまりどう生きるかということであり、その点において人間観と切り離せないものとなっているのです。ただ、価値感、人間観が大切だと言っても、学生にこれが持つべき価値観だとか、人間観だということは言うべきではないと思います。しかし、学生の成長を援助する教師という立場からすると人間の成長の方向、法則、目的がはっきりと捉えられてこそ今学生に何が必要か、またそのためにどんな援助が必要かわかるのではないかと思います。確かに、南山短期大学にはキリスト教の精神に基づき「人間尊厳のために」という建学の精神があります。しかし、それだけでは私にとって“今どこに行くのか”そして“だからこそこれが必要だ”とか“こういう援助が必要なんだ”といった現場での問いに対する答えにはならなかったのです。「人間の尊厳のために」という精神に対して異論を持つスタッフは誰もいないと思いますが、スタッフチームとしてそこから一緒に力を汲み出すには至っていないと思います。その意味で、大庭先生が以前から言っていた『人間関係科独自の人間学の創造』の必要性・重要性がわかります。それが無いと、体験学習も単なる方法論に過ぎなくなってしまうのではと危惧するのです。今、私はシュタイナーの教育理論・人智学に関心が向いていますが、そこから人間関係科的な人間観というものが見えれば、これまで言われ続けて来た変革体ということに対しても新しい光が当たるのではないかと期待して学んでおります。

（文責 グラバア 俊子）

体験学習と理論学習をめぐって

— 背後を読む —

中野 清
(南山短期大学講師)

上智大学でアウグスティヌス、ポエティウスなどを
中心にして西洋中世哲学を専攻。
存在論、身体論の視角から人間関係を研究している。

人間関係科のなかには「体験学習」と「理論学習」を対立的にとらえる見方がある一方で、創設期のカリキュラム案のなかでは両者を統合することが強調されている。「統合する」という言葉には、対立関係にあるそれぞれ別のものをどう統一したらいいかという仕方で問題がくみだてられているひびきがある。こうした考え方の根底には、人間をまず全体的なひとつのものにとらえるのではなく、心と身体あるいは精神と肉体の二つの実体としてとらえる近代のデカルト的二元論の考え方がひそんでいるのではないかと思われる。人間をいかに全体的存在としてとらえるかがこの場合根本的な問題となってくるように思う。

さて、体験学習と理論学習という場合、体験・理論・学習の三つのことをそれぞれどうつなげていくかを考えてみると、①「理論を学ぶ」②「体験から学ぶ」という言い方がまず浮かんでくる。そのほかに、ある体験をすること自体が目的となるという意味で、③「体験を学ぶ(する)」というつながりも考えられる。だとすると、同じ体験学習といっても②と③では位相の違いがあるのではないだろうか。

つぎに体験と理論の関係をみてみると、①と②は「体験から理論を学ぶ(つくる、確認する)」という仕方で、つなげることができる。それゆえ両者は対立関係にない。このことは体験学習の方式説明であるE I A H E'のステップと、経験科学の方法論(観察—理論化の過程と実験—検証の過程)とは軌を一にしており、そのかぎりでは体験と理論は相補的に循環しあいながら、ひとつの学習過程を形成しているとみることが出来る。この場合、体験学習は科学の一般方法論を人間行動に適用したものであり、行動科学の一端としてみれば、理論学習との「統合」も当然と考えられる。

それに対し、①と③は対立すると考えられる。近代の合理的思考(理論)はそれが対象とするあらゆるものを、まず分析しそれを総合するのがつねである。I A Hの過程もそうである。ところが、③の体験を「感情」を例にとって考えてみ

る。感情は、その人の全体を、その時を表わしており、要素に分割できない。だからそれは、本来的には理由が不定であり、その時そうだとしか言いようがなく、またその時の一回的なものである、という特徴をもつ。したがって感情体験そのものは上のE I A H（理論化過程）のルールにのせることはできない。ではあらゆる意味で知（理論）の対象にならないか。そうだとすると、体験学習は知に開かれぬ実感信仰に陥ってしまうことになる。

そうではなく、哲学からみると、①と③は、文字通りの新しい体験が、新たな世界の見え方、地平（全体にかかわる知）を開いてゆくことを意味している。ただしそれは言葉（理論）を前提としている。そのような非日常的な体験場面を作り出したのが「ラボラトリー」で、フィード・バックなどの新しい言葉をなんらか体験的に学ぶことによって、新たな生きる地平がひらかれてくる。体験学習がそうしたことをねらっているなら、言葉（知）の学習という意味での様々な理論学習は決してそれと対立するものではなく、むしろ補強するものだといえる。

感情の体験にあらわされたように、人間は全体的存在である。この全体はどのようなとらえられるか。

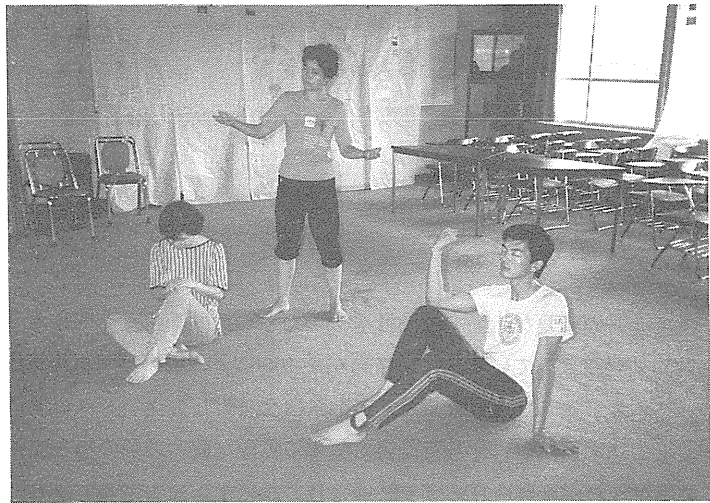
私が生き関わっている世界、人間関係が展開する日常世界は、私の眼前、「前方」にひろがっている。そこに現われるものを見分けてそれを手に入れる。これが我々の生きてゆく行動の基本である。手や足は、前方にしか動かないようにできている。認識と行動とは我々の「身体」のつくり（構造）とひとつに結びついているのである。この身体に背中があること、そのため背後の空間をもっていることの意味が重要である。「私の背後」は、私に見えないだけでなく、むしろ他者に見られ、つかまれるものである。背後の存在は、私がつねに他者とのかわりのうちにおかれていることを予告するものである。このように前―後へと異なる意味性をもってふくれた「身体」が私という人間存在の全体である。

前方の世界は私が主体的能動的に振る舞う世界である。そこに登場してくるものは、私によって物としての固定した形を与えられ対象化・実体化されることにより、私の世界に現象し見えるものとなって私の支配下におかれる。私は他を実体化することにより、ものを見分け、対象として処理してゆくのである。しかしこのような前方への視向はつねに自己忘却をもたらす。そしてそのことは自己の背後空間の忘却をも当然ともなってくる。このように背後の世界、真に主体的なものとしての他者が登場してくる場を切り捨てたところに、近代的な主体性・主観性の論理と合理的な世界像が作られてくる。しかしここにはなにか大切な生きる世界が見落とされているように感じる。

では我々の目に隠れた背後の世界はどのようにして知られ、感じられるのか。

それは、そのように主人として振る舞うお前自身は何者かと、背後から自己が「問われ」であるのだと自覚され、また「答え」をうながされるときではないだろうか。背後は前方のもつ視覚の論理がとどかないところであるが、他者の「呼び声」は背後からも聞こえてくる。聴覚の論理は背後においても成り立つこと

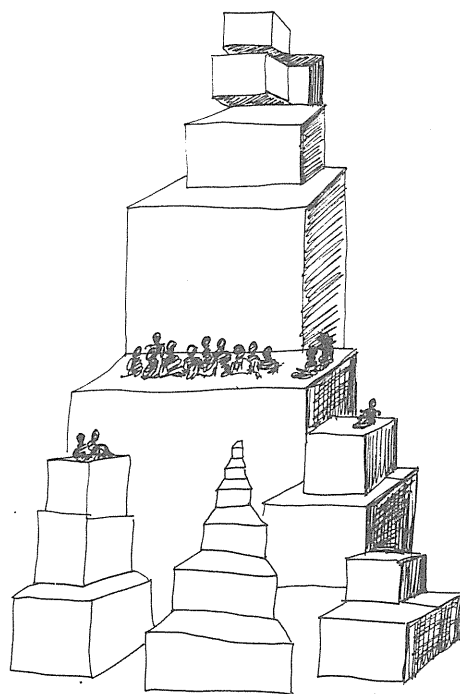
に意味がある。他者の呼びかけは「他者の言葉」である。そのように見える形ではなく、語る一聴く「言葉」において他者とかかわることが重要となってくる。言葉において自分が出会うもの、体験するものを読みとってゆくこと、背後で自分の日常性を支えているものを読みとってゆくことが、人間を全体として読み解くためには重要である。さらに人間存在、存在全体を成り立たせている背後をいかに読み解くか。謎めいた形でしか読めない。その謎を解読することが、基本的に、人間を知るという営みであると思う。 (文責 中野 清)



■ 社会人研修／概要

“ねむりこけたままほうられている人が多すぎる”

—サン・テグジュペリ



センターの重要な活動である社会人のための公開講座は、昭和52年のセンター発足時から毎年定期的の開講されている基礎研修講座を中心に、各種の専門研修講座や特定研修講座を開催している。これらの講座は南山短期大学が地域社会に対してユニークな学習の場を提供する機能と同時に、センター研究員に対して教育訓練に関する多様な臨床経験の場を提供する機能とを果している。

基礎研修講座は毎年春秋2回開催され、既に14回を重ねている。基本的なプログラムは週1回約3時間(午後6時15分～9時)の研修を8週間続けて1コースとし、体験学習による自己理解や他者理解、コミュニケーション・プロセス、グループ・プロセスの基礎を学ぶことを目指している。受講者にとっては、利害関係にとらわれることなく、さまざまな人々と接触を持つことも魅力の一つであり、そこから新しい友人関係や仲間意識が、自主研修グループに育っていく場合もある。

専門研修としては、“自己理解を深める”研修と“グループ・プロセスの理解を深める”研修とが基礎研修に続く研修として開講されている。いずれも集中的な体験過程を重視するため、1回1泊2日の宿泊研修を2回続けて1コースとしている。

特定の専門職にある人々のための特定研修講座として1984年度から「教師のためのセミナー」が開講されており、また現在休講になっている“カウンセラーのための講座”も再開を目指して準備中である。

一方、コンサルテーション活動は地域社会の個人や組織体に対してセンターが提供できる専門的援助機能であり、1984年度は「名古屋いのちの電話準備委員会」に対して約100名の電話相談ボランティアの「人間関係基礎訓練」の訓練計画の立案・実施の援助を行なった。この「名古屋いのちの電話」は1985年7月から相談業務に入る予定になっている。

この7年間の各開講講座の概略および参加者数とその内訳は別表の通りである。

■ 社会人研修／人間関係基礎研修講座

自分自身のことをもっとよく知りたい、自分の行なっているコミュニケーションのあり方を点検したい、グループのメンバーとしての自分の能力をみがきたい、など人間関係の学習の主要テーマを、特別に開発された実習を個人やグループで実施しながら、体験的に学習してゆきます。

この研修は、毎週一回ウィークディの夜間（6：15～9：00）を用いて、8週間で一コースになるように計画されています。春・秋各一回開催しております。

〔参加資格〕 20才以上の健康な方（男女・学歴は問いません）

〔参加定員〕 40名

この講座は開設当初は「入門講座」と称していたが、第9回から「基礎研修」と改められ、これまで通算14回、参加者519名を数えた。

（例） 第14回 人間関係講座 基礎研修

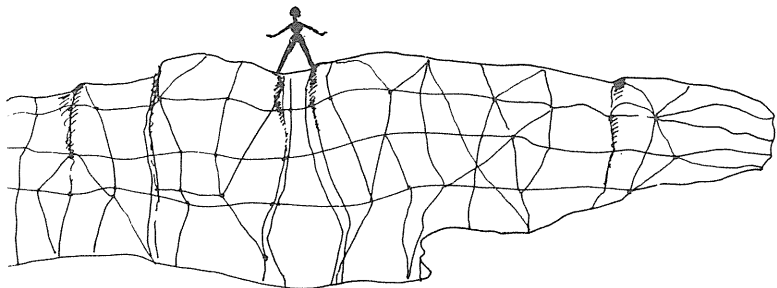
講座のねらい

今ここでのお互いの関係の中で

- ・自分がどのような動きをしているのか。
- ・他者がどのように動いているのか。
- ・相互にどのように影響し合っているのか。
- ・どんな行動パターンがあるのか。
- ・自分、他人がどのような価値感をもっているのか。
- ・グループの中にどのようなことが起っているのか。

などに気づき、

自分、他者、グループに適切な行動をとる。



全 日 程 表

1984・9/28～11/30

9月28日		10月5日		10月12日		10月26日	
PM 6:15	受 付	PM 6:15	受 付	PM 6:15	受 付	PM 6:15	受 付
	開 会		実習4 「ブロックモデル」 グループの課題達成		導 入		実習7 「ノンバーバル・コミュニケーション」
	実習1 「お互いに知り合うために」	6:45		6:45	実習5 「聴く」		
7:15	研修のねらいの説明				実習6 「聴く・観る」 他人と話し合いをする ときの自分の検討 表記入・集計		実習8 「無言の集団作業」
	実習2 「講座の期待の 共有化」						
8:00	休 憩 (お茶)		ふりかえり				
8:15	実習3 「実習スタイルの インベントリー」	8:15	休 憩 (お茶)	8:30	休 憩 (お茶)		休 憩 (お茶)
	小講義 学習方法について (EIAH)	8:30	全体で分ち合い		分ち合いと まとめ		ふりかえりと コメント
9:00		9:00		9:00		9:00	
11月2日		11月9日		11月16日		11月30日	
PM 6:15	受 付	PM 6:15	受 付	PM 6:15	受 付	PM 6:15	受 付
	分ち合い グループ観察の 指針		小講義 前回のまとめ 心の四つの窓	6:30	導 入		導 入
7:00		実習9 「PO-PO-PO (1)」	6:45	実習11 「的あて」		実習13 コンセンサスによる 集団決定 「ある主婦の死」 1.個人決定 2.集団決定 3.結果の公表 4.ふりかえり	6:45
7:50	休 憩 (お茶)	7:45	休 憩 (お茶)				8:00
8:00	実習10 「PO-PO-PO (2)」	8:00	実習12 「フィードバック サークル」		休 憩 -----		全体での話し合い
8:50	コメント フィードバックに ついて		ま と め				アンケート
9:00		9:00		9:00		9:00	

■ 社会人研修／人間関係専門研修講座

通称「継続研修」と呼ばれ、人間関係講座で基礎研修を終了した方や、既に体験学習による研修に参加したことのある方で、さらに学習を深めたい方々のための研修です。ウィークエンドに行なわれる一泊二日の集中的なプログラムで、二回で終了するように計画されています。

これまで10回の講座が開かれて、122名の参加者があった。

継続研修（A） ー自己啓発ー

特に自己理解を深めることや自己表現を試みることを通して自分の可能性を発見し、他者とのかかわりの中で自己成長してゆくのに必要な能力を養えるように援助します。

継続研修（B） ーグループ成長ー

グループやチームのメンバーとしての自分や他者の影響関係に気づき、人間関係の改善や相互援助関係・信頼関係の形成に必要な能力を養えるように援助します。

人間関係講座 ー継続研修Aー（1984年度）

自己啓発

“グループ内での相互関係を通して自分の可能性をひろげる”

この講座のねらいは

- ◆ 相互援助関係のなかで自己理解、他者理解を深める。
- ◆ 新しい自己表現を試みる。
- ◆ より創造的なかかわりあいをもつ。

☆この講座の特徴は……

- ・フィンガーペインティングや立体構成による表現と対話によって相互の関わりを深める。



講座担当者

南山短期大学 木村 晴子
会 沢 俊 三

全 日 程 表

	7月14日(土)	7月15日(日)	7月21日(土)	7月22日(日)
7:00				
8:00		朝食(ベタニア)		朝食(ベタニア)
9:00		映画「To see or Not to see」		「これが私です」(3) 「ウォーミング・アップB」 「Clay modeling」
9:30		私のLab Nameをつける		
9:45				
10:00		「ウォーミング・アップ」		休 憩 「フィンガー・フィンティング の再構成」 ～感う～(馬淵) ～生きている森～(関口) ～炎と水～(彼谷) ～山辺の水遊び～(岡本)
11:00				
12:00				
12:15		昼食・休憩		昼食・休憩
1:00		「性格調査」についての 講義		「これが私です」(4) 「私の名刺づくり」(2) : 自己紹介と 贈物・信頼の輪
2:00	折紙・エリマキトカゲ 「目かくし探索」		「これが私です」(1) ～等身大の絵姿の私～	
3:00				
4:00	休 憩 「名前とファーストイン プレッション」		休 憩 「フィンガー・ ペインティング」 ～再生への願望	「私への手紙」・個人面談
4:30		ふりかえり		修了証書
5:00	「私の名刺づくり」(1)			
6:00	夕食・(私の名刺を胸と 背中につける) 休 憩		夕 食 休 憩	
7:00	映画「モザイク」		個 人 面 談	
8:00	「粘土による造形活動を 通しての自己表現」		「これが私です」(2)	
9:00	～性格調査～			
10:00				

■ 社会人研修／人間関係特定研修講座

教師のためのセミナー

「生き生きした授業をつくる」

— ヒューマニスティック・エデュケーションへの接近 —

このセミナーは現在教職に就いている人々が、学級の中でのひとりひとりの児童・生徒の真実の姿に迫る視点を探り、子供たちが生き生きとした感情や意欲を発達させることができるような授業をつくり出せるように、自己発見と自己成長のための相互啓発の場を提供することを目的としています。

特に次の様な方におすすめます。

- ＊ 児童・生徒の知識や技能を伸ばすだけでなく、情意をも豊かに伸ばす授業づくりに取り組んでいる方、又は取り組みたい方。
- ＊ 体験やイメージやファンタジーを使って、教室での学習をもっと楽しく興味深いものにしたいと思っている方。
- ＊ 児童・生徒ともっと深いところで対話を持って、心理的成長を援助できるようになりたいと願っている方
- ＊ 教師としての自分の可能性をもっと探してみたいと思っている方

1984年度は10月6日～85年1月19日までの土曜日（午後3時～6時）に11回実施され、小・中・高・専門学校の現職教員12名（女8・男4）が参加しました。内容は、自分自身の情動に対する気づきを深めるための実習や話し合いを中心にしたゲシュタルト・アプローチを取りながら、適時読書報告や参加者の教育実践報告などが交えられ、熱心に進められました。

日 程	内 容	日 程	内 容
10/ 6	ねらいの提示と共有化 自分を語る実習	12/ 8	自由な話し合い 小 講 義
10/13	自由な話し合い・読書感想 気づきの実習	12/15	自由な話し合い リフレクターの実習
10/20	自由な話し合い・読書感想 ファンタジーの実習	12/22	自由な話し合い リフレクターの実習
10/27	自由な話し合い 教育実践報告	'85 ₁ /12	自由な話し合い ファンタジー・ムーブメントの実習
11/10	自由な話し合い 気づきの実習	1/19	自由な話し合い 小 講 義
11/17	自由な話し合い パーソナル・リスポンスの実習		

— 参加者の感想の中から —

- ＊ 「教える」ということは技術より心を育てることだと思う。そのためどの様に子供にかかわっていったらいいのかということも教えてもらったように思うが、今までの自分がやってこなかったようなことばかりなので、自分自身に非常に迷いがある。
- ＊ 押しつけをしないようにする態度が育った。
- ＊ 自分について“したいこと”と“したくないこと”とが明確化されたことによって、余分なカラが取れたように感ずる。
- ＊ よい仲間めぐり会えて、とても良かった。
- ＊ これまでの子どもへのかかわり方を見直すことができたと同時に、少しではあるが子どもへのかかわり方に変化が見られた。
- ＊ 学んだことを、個々の生徒との関わりの中で試みたり、自分自身に対して、試みたりすることで、自分の中の混沌が少し整理されてきたように思える。
- ＊ 自分自身の心、潜在的にあるものをはっきり意識できたり、イメージを思いうかべる訓練をしたことは自分にプラスになっている。
- ＊ いろんな学校の先生が集まっているので、学校教育の現状がわかった。



■ コンサルテーション

○ 「名古屋いのちの電話」電話相談員養成講座の計画と実施

「いのちの電話」は、訓練を受けたボランティアが電話を通して、さまざまな悩みや心の危機に直面しながら身近に相談できる相手がなく孤独の中にいる人たちの、良き相談相手になっていこうとする市民の奉仕活動である。1953年にロンドンで始められ、現在では世界40ヶ国、数百都市に設立されている。日本では、1971年に「東京いのちの電話」が開設され、今日まで東京、横浜、京都、大阪など17都市に設立され、「日本のいのちの電話連盟」を組織して各地でそれぞれ独自の活動をしている。

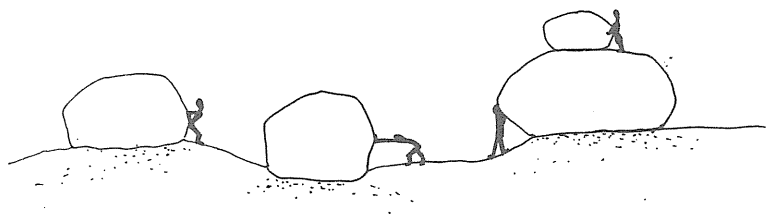
「名古屋いのちの電話」は全国で20番目の「いのちの電話」組織として設立準備が進められており、1985年6月の開設に備えて100名余りのボランティアが1年間に及ぶ相談員養成講座に参加している。人間関係研究センターは、名古屋いのちの電話訓練委員会からの要請で、この相談員養成講座の第一課程である人間関係基礎訓練のプログラムの立案と実施のコンサルテーションを行なった。

基礎訓練は「自己理解を深める」をねらいとして、1回2時間のセッションを毎週1回、計8回の体験学習プログラムとして立案し、1984年5月～7月及び1985年1月～3月にセンター研究員が中心になって実施した。

ねらい：「自己理解を深める」

- 自分の価値観（考え方や感じ方や行動の特徴）に気づく
- 自分のありのままを表現する
- 相手のありのままを聴く
- 対人関係（自分との、他者との）のなかにある自分のあり方に気づく
- 今、ここでの関係の中におこっていることに気づく

この訓練は、電話相談員養成の目的で行なわれたのであるが、決して相談員となるための技能訓練ではない。社会の中で、人とのかかわりの中で、共に生きようとするときに、誰れにでも求められることがらの訓練としてプログラムされたものである。



名古屋いのちの電話 人間関係基礎訓練の全日程表

1984年度

日程	ね ら い	実 習 や 講 義
開 講	<ul style="list-style-type: none"> ・いのちの電話について ・基礎訓練の前・後期別と昼・夜別の決定 ・訓練の案内 	
第 1 回	<ul style="list-style-type: none"> ・学習のねらいを明確化する。 ・体験学習の学び方を理解する。 ・学習グループづくりをする。 ・お互いに知り合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ねらいの提示と明確化 ・SCT ・実習「私の四つの窓」
第 2 回	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションのあり方に気づく。 ・グループの中での自分のあり方に気づく。 ・グループづくり 	<ul style="list-style-type: none"> ・実習「バスは待ってくれない」
第 3 回	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の話し方、きき方の特徴に気づく。 ・人と対話する時に起こってることがらに気づく。 ・フィードバックをいかしてみる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実習「たずね・こたえ・観察する」
第 4 回	<ul style="list-style-type: none"> ・グループの中での自分のコミュニケーションのあり方に気づく。 ・自分のグループへの参加のしかたに気づく。 ・グループへの自分の参加のしかたに気づく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実習「コンセンサスを求めて」
第 5 回	<ul style="list-style-type: none"> ・自分がどのように聴いているかに気づく。 ・積極的な聴き方を探り、試してみる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実習「聴く」
第 6 回	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ・プロセスに気づく。 ・グループへの自分の参加のしかたに気づく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・講義「グループで何をみるか」 ・実習「グループ討議と観察」
第 7 回	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ・プロセスに気づく。 ・グループへの自分の参加のしかたに気づく。 ・援助関係のあり方を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・講義「援助関係」 ・実習「グループ討議と観察」
第 8 回	<ul style="list-style-type: none"> ・この時点での自分を表現してみる。 ・“Self Box”を作り始める。 ・お互いに印象を分かち合うことを通して、他者の自己理解を深める助けとなる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実習「印象交換」 ・実習「Self Box」
合 宿 (1泊2日)	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでやってきたことを確認し、さらに自己理解を深める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実習「Hope Island」 ・実習「無言の集団作業」 ・実習「目かくし探検」 ・全体会「一人になってふりかえる」

■ 社会人研修／参加者統計

社会人研修講座受講者数

人間関係研究センター

講座名	期 間	時 間	曜 日	参 加 者 数	性 別		居 住 地		職 業										年 令				
					男	女	市 内	市 外	公 務 員	団 体 職 員	会 社 員	自 営 業	医 療 関 係	教 育 関 係	教 会 関 係	主 知	学 生	そ の 他	20 ～ 29 才	30 ～ 39 才	40 ～ 49 才	50 才 以 上	
人間関係基礎研修	入門講座(1)	S52 10/13~ 12/28	18:00 ~ 20:30	木	48	25	23	31	17	4	7	18	4	6	2	4	3	0	0	15	18	16	4
	入門講座(2)	S53 5/20~ 7/8	14:00 ~ 17:00	土	42	10	32	32	10	0	3	8	0	2	9	2	10	8	0	15	18	11	3
	入門講座(3)	S58 10/12~ 12/7	18:15 ~ 20:45	木	45	12	33	16	29	6	0	12	4	3	3	2	4	10	1	19	10	10	6
	入門講座(4)	S54 5/10~ 6/28	18:15 ~ 21:00	"	43	18	30	34	9	2	1	14	0	1	8	10	4	2	1	26	13	2	2
	入門講座(5)	S54 10/4~ 11/29	"	"	38	5	33	27	11	0	1	6	2	3	13	3	1	6	3	20	11	3	4
	入門講座(6)	S55 5/8~ 6/28	"	"	30	7	23	24	6	3	0	5	0	3	5	1	4	6	3	14	10	3	3
	入門講座(7)	S56 4/30~ 6/18	"	"	26	9	17	18	8	1	2	9	1	2	3	0	4	3	1	14	5	3	4
	入門講座(8)	S56 9/24~ 11/12	"	"	25	14	11	20	5	1	2	12	0	1	2	0	2	3	2	15	7	3	0
	基礎研修9	S57 5/6~ 6/24	"	"	28	11	17	21	5	2	0	5	2	1	2	4	5	5	2	12	6	8	2
	基礎研修10	S57 9/24~ 11/12	"	金	34	14	20	25	9	2	2	8	1	2	4	1	6	5	3	14	13	7	0
	基礎研修11	S58 5/6~ 6/24	"	"	38	18	25	23	15	2	0	12	3	8	2	1	3	4	3	25	7	3	3
	基礎研修12	S58 9/30~ 11/25	"	"	32	10	22	15	17	4	2	9	4	3	2	0	2	5	1	25	6	0	1
	基礎研修13	S59 5/11~ 7/6	"	"	50	16	34	33	17	1	4	17	1	8	10	1	6	0	2	27	14	7	2
	基礎研修14	S59 9/28~ 11/30	"	"	40	8	32	26	14	5	4	9	0	8	4	1	3	1	5	21	12	6	1
計				519	167	352	347	172	33	28	144	22	51	69	30	57	58	27	262	140	82	35	
人間関係専門研修講座	人間関係講座Ⅱ	S58 10/28~ 11/25	18:00 ~ 17:00	土	24	7	17	22	2	2	3	2	0	4	3	1	3	6	0	7	9	7	1
	人間関係講座Ⅰ	S54 10/13,14 20,21	14:00 ~ 16:00	1日2日 土・日	14	6	8	9	5	2	0	3	0	3	3	0	0	2	1	6	7	1	0
	人間関係講座Ⅰ	S55 10/4,5 11,12	"	"	8	3	5	6	2	2	1	0	0	2	2	0	0	1	0	2	3	2	1
	人間関係講座Ⅱ	S55 10/18,19 25,26	"	"	8	2	6	7	1	0	2	1	0	2	0	0	0	3	0	4	2	1	1
	人間関係講座Ⅰ	S58 9/14 20,21	"	"	16	3	13	12	4	1	2	1	0	2	0	0	3	5	2	8	4	2	2
	人間関係講座Ⅱ	S56 11/7,8 14,15	"	"	7	1	6	6	1	1	1	2	0	1	1	0	0	1	0	2	2	3	0
	人間関係講座A	S57 6/12,14 19,20	"	"	8	5	3	7	1	2	1	0	0	1	1	0	0	1	2	1	2	2	3
	人間関係講座A	S58 7/9,10 23,24	"	"	20	5	15	14	6	1	0	7	2	8	1	0	1	0	0	11	6	3	0
	人間関係講座A	S59 7/14,15 21,22	"	"	4	0	4	2	2	0	0	1	0	1	1	0	1	0	0	1	0	3	0
	人間関係講座B	S59 1/21,22 24,5	"	"	13	1	12	5	8	0	1	4	0	3	5	0	0	0	0	7	2	4	0
計				122	33	89	90	32	11	11	21	2	27	17	1	7	19	5	49	37	28	8	
人間関係特定研修講座	CLL講座1	S52 11/4~ 12/9	16:30 ~ 18:00	金	14	6	8	7	7	0	0	1	1	0	12	0	0	0	0	2	3	2	2
	CLL講座2	S53 5/19~ 7/7	17:00 ~ 18:00	金	2	0	2	2	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	1	1	0
	計				16	6	10	9	7	0	0	1	1	0	14	0	0	0	0	2	9	3	2
	カウンセリング	S58 6/10~ 7/22	17:30 ~ 20:00	土	15	2	13	7	8	0	2	1	0	1	10	1	0	0	0	5	5	3	2
	カウンセリング	S54 10/6,7,13 14,21,22	14:00 ~ 17:00	土 日	15	1	14	15	0	0	1	2	0	1	5	6	0	0	0	3	1	4	7
計				30	3	27	22	8	0	3	3	0	2	15	7	0	0	0	8	6	7	9	
リーダーのための キリスト教講座	S56 8/24~ 27	9:00 ~ 21:00	月~ 木	17	4	13	4	13	0	0	0	0	0	0	17	0	0	0	1	2	9	5	
教師のための セミナー	S59/10 S60 1/19	15:00 ~ 18:00	土	12	4	8	8	4	0	0	0	0	0	12	0	0	0	0	2	5	4	1	
総 計				716	217	499	480	236	44	42	169	25	80	127	55	64	77	32	324	199	133	60	

■ 社会人研修／1985年度人間関係研究センター事業予定

南山短期大学 The Center for the Study of Human
人間関係研究センター Relations Nanzan Junior College.

個性ある生き方と人間性豊かな社会をつくり出すために

私たちは一人ひとり豊かな人間性と独自の個性とを持ったかけがいのない存在です。ところが現代社会の中で私たちは、役割の中に埋没し、互いに心を閉ざし、かかわり合うことをおそれ、人間をあたかも物の如くに扱い、自分も取るに足らぬ者としか感じられなくなってはいないでしょうか。

人間関係の教育は、対話を通して自分の価値観や人間性をみがき、他者への思いやりと感受性を豊かに養い、ひとりひとりが生きられるグループや共同体を形成し、人間疎外の社会を愛と信頼関係のあふれる人間尊重の社会へと変革することと、それらの担い手を育てることに取り組みます。

いまこそ本当に人間関係の教育が必要とされているのです。

一般研修

人間関係講座 一基礎研修一

自分自身のことをもっとよく知りたい、自分の行なっているコミュニケーションのあり方を点検したい、グループのメンバーとしての自分の能力をみがきたい、など人間関係の学習の主要テーマを、特別に開発された実習を個人やグループになって行いながら、体験的に学習してゆきます。この研修は、毎週一回ウィークデイの夜間（6:15～9:00）を用いて、8週間で一コースになるように計画されています。春・秋各一回開催しております。

第15回 人間関係基礎講座

1985年5月10日（金）～6月28日（金）午後6時15分～9時

第16回 人間関係基礎講座

1985年9月27日（金）～11月22日（金）午後6時15分～9時

（但し、11月1日は休み）

〔参加資格〕 20才以上の健康な方（男女・学歴は問いません）

〔参加定員〕 40名

〔参加費〕 12,000円

継続研修

基礎研修を終了した方や、既に体験学習による研修に参加したことのある方で、さらに学習を深めたい方々のための研修です。ウィークエンドに行なわれる一泊二日の集中的なプログラムで、二回で終了するように計画されています。

継続研修（A） ー自己啓発ー

特に自己理解を深めることや自己表現を試みることを通して自分の可能性を発見し、他者とのかわりの中で自己成長してゆくのに必要な能力を養えるように援助します。

1986年2月22日(土) 午後2時～23日(日) 午後4時

3月 1日(土) 午後2時～ 2日(日) 午後4時

〔参加資格〕 20才以上の健康な方(男女・学歴は問いません)で原則として基礎研修または体験学習を主とした研修に参加された方

〔参加定員〕 20名

〔参加費〕 12,000円

継続研修（B） ーグループ成長ー

グループやチームのメンバーとしての自分や他者の影響関係に気づき、人間関係の改善や相互援助関係・信頼関係の形成に必要な能力を養えるように援助します。

1985年7月6日(土) 午後2時～ 7日(日) 午後4時

7月13日(土) 午後2時～14日(日) 午後4時

〔参加資格〕 20才以上の健康な方(男女・学歴は問いません)で原則として基礎研修または体験学習を主とした研修に参加された方

〔参加定員〕 20名

〔参加費〕 12,000円

特定研修

教師のためのセミナー

「気づきを深める」 ーヒューマニスティック・エデュケーションへの接近ー

「子供の真実の姿を理解していることは、効果的でなお創造性のある授業の実現に半ば成功したようなものだ」と言われますが、現在の教室での状況はいかがでしょうか。子供の真実の姿を理解するどころか、教師として子供たちの見せかけの言動にまどわされたり、色眼鏡で子供たちを見てしまったり、自分の感受性の乏しさに気づかないこともしばしばですし、逆に子供たち自身が自分の真実を見失ってしまっていることすら起こっています。このセミナーでは、学級の中での子供たちのありのままの姿をみる目を養い、ひとり一人の子供の真実に迫る視点を探ります。

このセミナーのプロセスは教職にある人々の相互啓発による自己発見と自己成長の機会になると思います。

1985年5月11日(土)～ 7月20日(土) 午後3時～6時

〔参加資格〕 現在小・中・高校で教職についておられる方

〔参加定員〕 12名

〔参加費〕 12,000円

南山短期大学人間関係研究センター規程

第1条 本学に南山短期大学人間関係研究センター（The Center for the Study of Human Relations of Nanzan Junior College）（以下「センター」という）をおく。

第2条 センターはキリスト教的人間観に立って広く学際的・行動科学的に人間・人間関係の研究および研修を行うことを目的とする。

第3条 前条の目的を達成するために、次の各号の事業を行う。

1. 人間・人間関係に関する研究と教育の推進
2. センターと目的を共通にする学外研究機関との協力
3. 地域社会における開かれた大学としての諸機能を果たすために研究会・研修会等の開催および個別的相談・指導・援助等
4. 研究成果の刊行ならびに文献・資料の蒐集と一般への公開
5. その他センターの目的達成のために必要と認める事業

第4条 センターに研究員を置き、そのうち1名を主任とする。

② 研究員および主任は学長が委嘱する。

第5条 主任はセンターの事業を掌理し、センターを代表する。

第6条 センターは必要に応じて顧問・相談員・講師をおくことができる。

第7条 センターはその目的にそって研修しようとするものを研修生として受け入れ指導・援助を行う。

研修生についての規程は別に定める。

第8条 センターに事務職員をおく。事務職員は主任の指示をうけてセンターの事務を担当する。

付 則

本規程は昭和52年9月30日より実施する。

■ 編集後記

南山短期大学人間関係科が設立されて、早12年を経過したことになる。その間に、本文に記されているようにユニークな学科ゆえに幾多の困難に直面してきたことと思う。またその困難に立ち向わせたのは、教員の献身的な情熱に負うところは大きいであろう。また、学生と教員とが共に学び合う場を創り出そうといった信念が、この12年の間に培われてきた故であろう。それは学生・教員とも苦難の道程でもあり、喜びでもあった。そして、言うまでもなく、南山学園の経済的な支援も多大であったことと同時に、南山学園の教育理念としての「人間の尊厳のために」の教育実践・研究が認められてきたからであろうと思う。

こうした南山短期大学人間関係科の教育実践に対しておかげさまで学内外の多くの方々にも関心を持っていただき、本学科を訪れる人々も少なくない。その数は公的・私的な見学を含め、数百名に及んでいると見られる。見学の方を案内する度に「ここでの教育実践を書き記したものは何かないですか?」と多くの方々から尋ねられ、案内しながらも、人間関係科での教育実践記録を出版し、世に問うことを感じつつ、忙しさの中で、そうした仕事ができていることへの自責の念を抱いたものである。

この度、人間関係研究センター紀要の特集として「人間教育における体験学習」が生まれ、その中で人間関係科での教育実践をまとめる機会が得られ、長年の課題がまずは達成されたことをうれしく思っている。予定の紙面がかなり上回り、今回は第2号、第3号合併号という形で刊行することになった。しかし諸先生方に見ればまだまだ書き足りないものがあると思う。また、10年余りの教育経験を数ページにまとめるには並々ならぬ苦労があられたことと思う。しかし、原稿を提出していただいた先生方から「よい機会が与えられ、人間関係科の教育をこの時点でふりかえてみることができ、有難く思う」とのお言葉をいただき、編集者一同うれしく思うしだいである。

また、本号を学外の多くの方々にも読んでいただき、人間関係科の教育をすこしでも御理解いただければ幸いである。さらには、人間関係科の教育への御批判、御指導をいただき、学習者一人一人を大切にす教育の充実をはかっていきたいと思う。

最後になりましたが、人間関係科の幸運な誕生に力を注がれたアルベルト・ボルト学園長、大庭征露先生、吉川房枝先生、柳原光先生、澤田慶輔先生、R.A. メリット先生、新納嘉夫先生、また、今日の間関係科に至るまでに御尽力いただいた諸先生方、職員の皆様はこの特集号を捧げます。

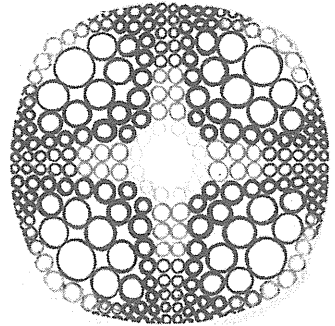
(津村俊充 記)

南山短期大学人間関係研究センター研究員

(1984年4月～1985年3月)

主任 中堀仁四郎

リチャード・メリット	堀部憲夫	伊藤雅子	星野欣生
會澤俊三	宮本 桂	大森正樹	山口真人
藤岡俊子	木村晴子	桜井 厚	中野 清
		津村俊充	



人間関係 第2・3号合併号

1985年3月31日 発行

編集者 津村俊充
會澤俊三
中堀仁四郎
星野欣生

発行所 南山短期大学人間関係研究センター
〒466 名古屋市昭和区準人町19番地
(052)832-6211・6214